

## &lt;原著論文&gt;

## 吃音児の能力・性格に関する諸特性について

早坂 菊子\*

本研究は2つの研究から構成されている。第1研究は吃音児の学習能力や性格特性に非吃音児と異なった分布特性があるのではないかという仮説のもとに、関東圏のことばの教室在籍児を対象として、10項目にわたる調査をおこなった。その結果、神経質、の項目と不器用の項目が該当項目として示された。特に合併症を持つ吃音児（多くは構音障害を併せ持つ）は、不器用であることが示唆された。第2研究では、第1研究で示された神経質、不器用がどのような特性なのかを調査するために中国、四国、九州地方のことばの教室の在籍児童を対象として10項目の調査をおこなった。その結果、全体的に对人的過敏性があり、手先が不器用であることがわかった。構音障害を併せ持つ吃音児は、身体全体も不器用であることがわかった。また、对人的過敏性が強いことが示されていた。吃音を研究する際、下位分類化する必要性の意義が認められた。

キーワード：吃音児，神経質，不器用

## 第1研究の問題の所在と目的

吃音児の臨床を行っているとき、その学習能力や性格傾向に、非吃音児と異なった分布曲線があるのではないかと感じることが多い。たとえば非常に几帳面な吃音児がいるかと思えば、きわめてずぼらでだらしない吃音児がいたり、手先が器用な吃音児がいるかと思えば、かなり不器用な吃音児がいたりする。その中間位に位置する正規分布の中間点の吃音児は少ないのではないかとの印象をかねてから得ていた。もし、吃音児の諸能力や性格特性が正規分布するのではなく、U字型の分布をするのだとしたら、吃音児には何らかの体質的な差異が非吃音児との間にあるのではないかということが示唆される。もし、この仮説が否定されると、吃音児の能力、性格特性は非吃音児と心理的といわれる差異にとどまり、体質的な差異は無視されることとなる。

本研究は、関東圏のことばの教室の教師と児童を対象として、調査紙を郵送し、回答を分析し、考察を加えるものとする。

## 第1研究の方法

対象：関東圏のことばの教室約300校

対象児：ことばの教室で吃音の指導を受けている吃音児童約3,000名

調査期間：2001年5月に調査紙を発送し、6月中に回答を要請する（しかし現実には筆者の都合で、9月に発送ということになり、6月中に回答をすると理解した担当者からは期限が過ぎていくということで回答をもらうことができなかった。

回収率：上記の様な理由で、回収率は30%にとどまった。  
調査用紙の作成：筆者がこの20年間吃音児（幼児も含む）の臨床にあたり、強く印象づけられた性格傾向、能力傾向を10項目に集約し、5段階で評定してもらえよう作成した。なおその際、性、学年、合併症の有無について記載をお願いした。また担当者の回答時、該当児童についての印象で良く、母学級の担任や両親に情報を得る必要がないことを申し添えた。

調査項目：神経質／ずぼら、音痴／歌がうまい、絵が苦手／絵が得意、不器用／器用、算数が苦手／算数が得意、国語の読みが苦手／国語の読みが得意、体育が得意／体育が苦手、友人関係づくりが苦手／友人関係づくりがうまい、人についていく方／リーダーシップをとる、忘れ物が多い／忘れ物をしない

回収人数：全体で308人、男児272人、女児36人であった。合併症を持っている者は40名であった。合併症は、構音障害、LD、ADHD、言語発達遅滞、かん黙等であった。

\*広島大学教育学部附属障害児実践センター

## 第1研究の結果

結果として正規分布と大きくずれるデータは得られず、どの項目もUの字型の分布はみられなかった。しかし全体群では、神経質が2の段階に偏る結果がでた(図1)。また国語の音読が苦手は2段階が最も多かった。女兒群だけ取り出してみると、やはり神経質項目で2段階が最も多く、全体群と共通していた。また忘れ物はしないは4段階が最も多く、几帳面な性格がうかがえた。さらに器用が4段階で最も多く、吃音児は不器用という印象が強いにも関わらず、女兒についてはそれが否定される結果となった。友人関係が稚拙であることも2段階が最も多いことから伺われ(図2)、一方、絵が得意(5段階)とするものが最も多かった。

合併症のある群では、友人関係の稚拙さが2段階、体育が苦手(2段階)、国語の読みが苦手(2段階)、不器用(2段階)(図3)、神経質(2段階)が最も多かった。全体群、女兒群と対比して、合併症を持っている吃音児は不器用であることが示唆された。得に構音障

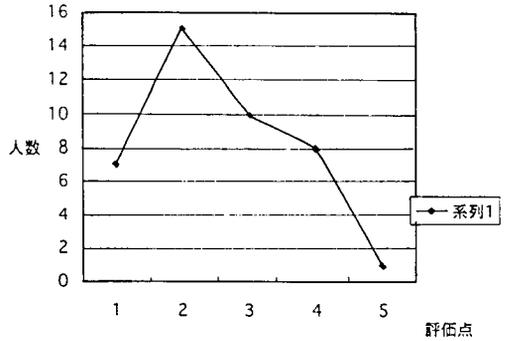


図3 不器用・器用(合併)

害(音韻障害)を併せ持つ吃音児は不器用であることが想定され、このことについては、今後の検討が待たれるところである。

## 第1研究の考察

すべての群で吃音児は神経質の傾向があることが示された。しかし全体群に比し、女兒群、合併症群を分離して検討すると、結果が異なっていることがわかる。一律に吃音といっても、吃音研究をする場合、下位分類が必要ではないかということが、本研究においても示唆された。

## 第2研究の目的

研究IIは、研究Iの結果を踏まえて、特に吃音児に顕著な特性と考えられる項目について、中国、四国、九州地方のことばの教室を対象として研究を行ったものである。研究Iで得られた結果から、全体群の神経質/ずばらの項目と、合併症群で得られた不器用/器用の項目についてより詳細に調べることを目的として、調査用紙を作成した。

## 第2研究の方法

対象：中国、四国、九州地方のことばの教室約400校  
 対象児：ことばの教室で指導を受けている吃音児童約1,200名  
 調査期間：平成14年7月  
 回収率：43%  
 調査用紙の作成：筆者が臨床の中で、吃音児の神経質さ、不器用さと感じられる諸側面を10項目づつ選択して作成する。

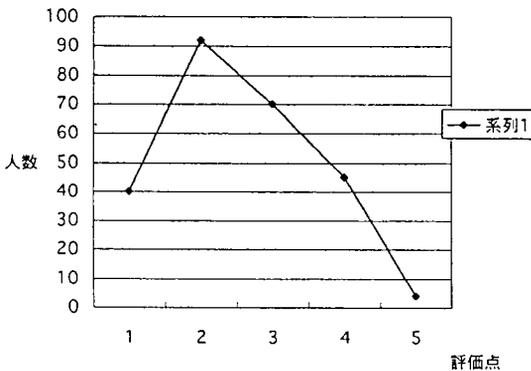


図1 神経質・ずばら (Total)

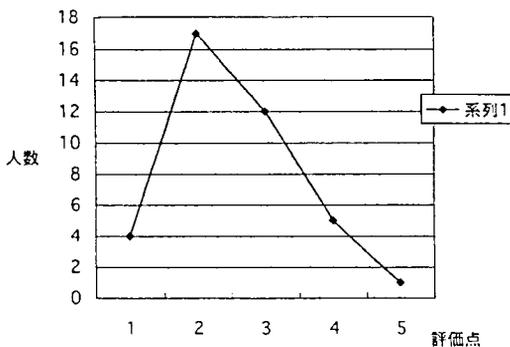


図2 友人(女兒)

調査項目：

1. 神経質に関する項目；①対人的に過敏である  
②食べ物に好き嫌いがある ③時間に厳しい④汚れを嫌う ⑤整理整頓に厳しい
2. 不器用に関する項目；①手先が不器用である  
②身体全体の動きが不器用である ③対人関係が不器用である ④人の気持ちを读むのが苦手である ⑤整理整頓が苦手である

回収人数：全体で272人，男児219人，女児53人であった。合併症を持っている者は，67人であった。合併症は，構音障害が半数を占め31名，その他，LD，ADHD，言語発達遅滞，かん黙，難聴，脳性まひ等であった。

第2研究の結果

全体としてみた場合，対人過敏が2段階で最も多く（図4），研究Iでみられた神経質さが対人過敏という点にあらわれていることが推測された。また研究Iで女児群以外で指摘された不器用さは，研究IIでは，手先の不器用さが2段階が最も多く（図5），身体全

体の不器用さは2，3，4段階がフラットな状態（図6），必ずしも不器用とはいえないという結果となった。しかし，構音障害を併せ持つ吃音児は，手先が不器用が2段階が最も多いのに加えて（図7），身体全体が不器用も2段階が極めて高く（図8），構音障害を併せ持つ吃音児の特性の一端が示されているように思われる。

また，全体としてみた場合，対人関係の不器用さが，2段階で最も多く（図9），吃音児の不器用さは対人の過敏性とともに対人関係における不器用さもあらわ

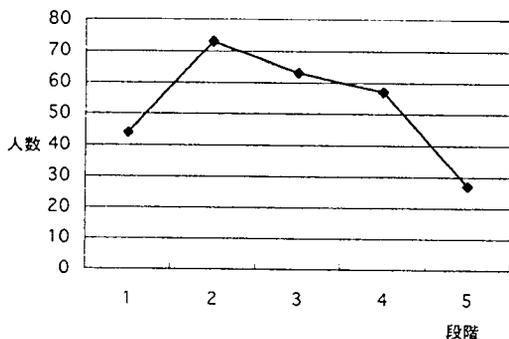


図4 対人過敏

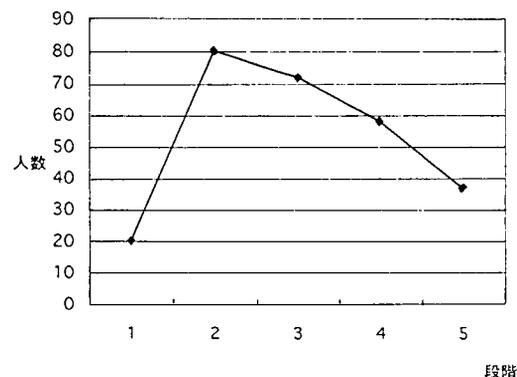


図5 手先が不器用

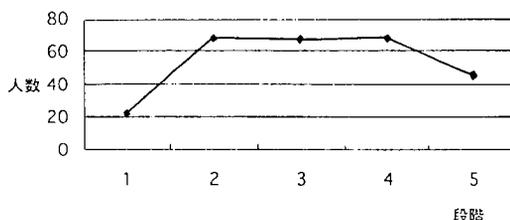


図6 身体全体の不器用さ

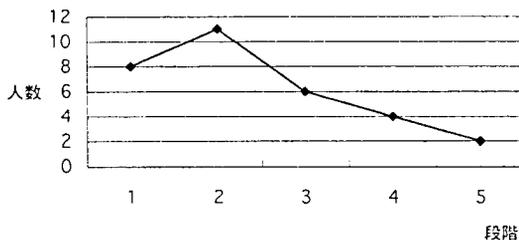


図7 手先が不器用 (構音)

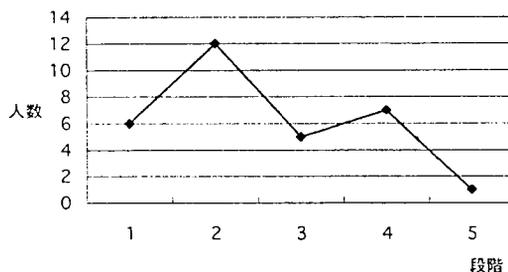


図8 身体全体が不器用 (構音)

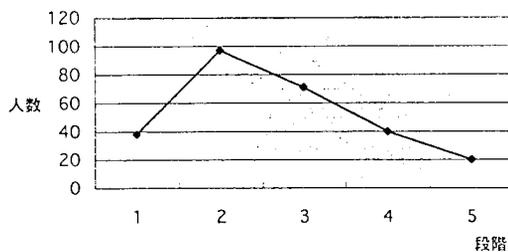


図9 対人関係の不器用さ

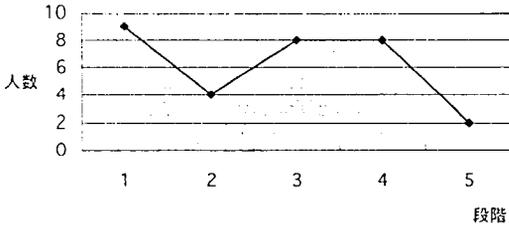


図10 対人的に過敏 (構音)

していることがわかった。さらに、構音障害を併せ持つ吃音児の対人的過敏さは1段階が最も多く(図10)、吃音児の特性をより鮮明に表しているように思える。

## 第2研究の考察

すべての群で対人関係の不器用さ、対人過敏性がみられ、さらに構音障害を併せ持つ群では、その不器用さと過敏性が顕著にあらわれることが示された。総数が少ないので断定的なことは言えないが、研究Iと同様に、吃音研究をする時は、群化、下位分類化しておこなう必要性があることが示された様に考える。

## 総合考察

研究Iでは、吃音児の性格特性や能力が、すぐれているか、劣っているか(性格については、判断しづらいところであるが)どちらかの極に偏向するという仮説をたてて、その検証を試みようとした。そこでその分布曲線をUの字型にたとえたのであるが、回収された数が300とあまりに少なかった。研究Iでは、この300程度の結果でUの字型仮説を否定したが、1つには、この10倍程度の数を集めれば、異なった結果が出たかもしれないこと、2つには、1と関連するが対象数を多くして、特に合併症のある症例について詳細な分析を試みる必要があるように考えた。

研究Iと研究IIにおいて、合併症として最も多いのは構音障害を伴うものであったが、これも吃音の下位群として考えなければならない類型であると考えている。さらに、LD、ADHDが多かった。LDの予測疾患として、吃音が明記されているが(原, 2000) LD、ADHDが重なっている子供が数多くいることがわかる。

吃音の臨床的同定として、早坂は表1を提唱しているが(早坂菊子, 1998)、吃音の維持因子の中には、LD、ADHDと重複する、或いは、その軽い程度の症例が存在する。これは、Van Riperの言うところの吃音のトラックIIに所属する吃音と考えられる。

表1 各因子の臨床的同定

|         |   |
|---------|---|
| 悪化条件:   | 発語の失敗体験<br>身体的、心理的圧力<br>罰体験、罪悪感→吃音の内面化過程に連なる<br>欲求不満  |
| 改善条件:   | 発語流暢体験<br>発語意欲  |
| 維持条件:   | パーソナリティ特性: 欲求不満耐性の低さ<br>過敏性、自己感情の表出の抑制<br>自信の欠如、自己不安全感<br>消極性<br>過度の用心深さ<br>失敗に対する恐れ<br>自罰性<br>これらは葛藤状況下で非流暢性の発生をもたらし、悪化条件と結びつく<br>吃音の維持条件となる |
| 神経学的要素: | 注意の障害<br>聴覚処理の障害<br>文章形成困難<br>口腔運動の問題<br>視知覚の問題<br>非流暢性発生の条件となるが、これだけでは吃音にならない、<br>悪化条件と結び付いて、維持条件となる   |

(VanRiper, 1971) 構音障害も当然にこの中に帰属するが、吃音を単体化して考えるよりも、複合した疾患の集合体と考えた方が吃音を理解するには適しているであろう。

研究IIは、研究Iで明らかとなった神経質と不器用さの実態をより明らかにするために行ったものであった。この2者を細かく分類して調査すれば、Uの字仮説も立証できるかもしれないと考えたが、研究Iと同様、対象児が少なく、どの項目においてもUの字型を描くことはなかった。しかし、吃音児の神経質さが対人的過敏性に拠るところが大きいことと、構音障害児にその傾向が強いこと、さらに、構音障害児が一般の吃音児よりも不器用であることが示された。LD、ADHDを合併しているものは、5名程度と少なく、分析の対象とはしなかったが、対象児数がより多ければ、あらたな傾向がみられるのではないかと考えている。合併症のある吃音児のより詳細な研究が必要であることが本研究によって示唆されているように思われた。

## 文献

- 小林宏明 早坂菊子 長沼秀明 寺田道乃 2000 音韻障害を併せ持つ吃音児の指導経過—U仮説に基づいて— 心身障害学 24
- 早坂菊子 1996 吃音の予防に関する一考察—構音障害を主訴とする症例の検討から— 音声言語医学 Vol.37 No.3 289-297
- 早坂菊子 小林宏明 1998 言語発達遅滞型吃音児の診断・治療過程—U仮説に基づいて— 音声言語医学 Vol.39 No.4 388-395

原 仁 2000 発達の遅れとLD－幼時期からの診  
断 わかるシリーズ LD と医療 日本LD学会  
編

Van Riper, C. 1971 The Nature of Stuttering.  
Englewood Cliffd, New Jersey, Prentice Hall.